

吉原直樹・飯笹佐代子・山岡健次
郎編

『モビリティーズの社会学』

有斐閣 2024年 xii+218ページ

伊藤 るり

社会科学が人の移動を論じるとき、領土が固定された国家、ならびに定住者が優位に立つ社会を前提として論じる傾向がある。これに対して、本書が扱って立つモビリティーズ・スタディーズは、イギリスの社会学者、J・アーリにならって、移動する側の人を中心に考える。さらにいえば、人のみならず、モノや情報などの移動にも光を当て、それらの移動過程の分析、あわせて空間認識の変容をも視野に入れて社会事象を理解することを提唱する。

アーリの代表作、*Mobilities* は2007年公刊 [Urry 2007]。以降、その社会科学へのインパクトは、『モビリティーズのまなざし』[小川(西秋)・是永・太田 2020]、あるいは『モビリティーズ・スタディーズ』[吉原 2022] などによって、日本でも活発に紹介がなされている。本書もそのひとつだが、執筆陣は、編者の1人、吉原直樹氏が故伊豫谷登士翁氏(2022年に逝去)とともに主宰してきた「モビリティ研究会」のメンバーであり、伊豫谷氏追悼の論文集となっている。また、題目は「社会学」とあるが、執筆者の専門は、社会学のほか、文化人類学、政治学、政治思想史などにひろがっている。

本書は、序章の導入のあと、理論的な議論の第I部「モビリティーズの論点」、つづいて経験的研究をとおしてモビリティーズを浮かび上がらせる第II部「グローバルゼーションからモビリティーズへ」の2部で構成される。

まず第I部をみよう(以下、敬称略)。第1章(吉原)でモビリティーズ・スタディーズの背景と意義、これを受けて第2章(伊藤美登里)ではU・ベックのメタモルフォシス理論(時間軸)とモビリティーズ・スタディーズ(空間軸)との接点、第3章(伊藤嘉高)で、人と人以外の存在の連関を問うB・ラトゥールらのアクターネットワーク理論(ANT)

との関連、最後に第4章(山岡健次郎)ではアジアの視点から、西欧由来の「近代」概念の批判的検討と植民地支配のもとで歴史的に作り上げられてきた「移動」をめぐる規範的考え方が検討されている。この第4章は、アジア、アフリカの事例を多く取り上げる第II部への伏線となる。

続く第II部では、第5章(小ヶ谷千穂)でフィリピン人家事労働者を中心とするモビリティーズの検討(ジェンダーと移動を取り上げている本書で唯一の章)、第6章(武内進一)でコンゴとルワンダの事例をとおして物資と人の管理を行う「ゲートキーパー国家」論、第7章(松本尚之)ではナイジェリアのイボ人ディアスポラを取り上げ、デジタル空間を介したピアフラ分離主義運動の考察、第8章(村橋勲)はウガンダ中西部キリヤンドンゴ難民居住地の事例を取り上げつつ、「境界の空間」で練り広げられる人、モノ、カネ、情報の複雑なモビリティーズ、最後の第9章(飯笹佐代子)は、オーストラリアの難民政策にみられる「移住ゾーン」の縮減と境界管理の多重性をナウルやPNGとのネオコロニアルな関係、あるいは国境産業複合体の観点から検討している。

越境する社会関係や社会構造をジェンダー視点から考察する国際社会学に関与してきた評者にとって、執筆者がそれぞれ奔放にモビリティーズを捉えていく本書は触発される部分も多く、自分の研究を進める上でも参考にしたい興味深い論点が含まれている。他方で、理論的な第I部と経験的研究の第II部の相互参照は少なく、両者を有機的につなげるような補足的記述を挿入することで読みやすさを増すことができたのではないかの感想をもつ。

2025年1月以降、トランプ政権が急ピッチで進める国境管理の厳格化や関税政策、あるいはまた情報をめぐる環境の大きな変化は、世界の移動=可動性、また本書が示唆するような社会の創発的可能性に少なからず制約を加えている。モビリティーズ・スタディーズにとって大きな分岐点となる時代を迎えたといえるだろう。

文献リスト

小川(西秋)葉子・是永論・太田邦史編 2020.『モビリティーズのまなざし——ジョン・アーリの思想と実践——』

丸善出版

吉原直樹 2022. 『モビリティーズ・スタディーズ——体系的理解のために——』 ミネルヴァ書房.

Urry, John 2007. *Mobilities*. Cambridge: Polity Press (邦

訳は吉原直樹・伊藤嘉高訳『モビリティーズ——移動の社会学——』作品社, 2015年).

(一橋大学名誉教授)